

PONTE

書くジャグリングの雑誌：「ポンテ」

通巻第六号



撮影者：青木直哉 於 BRITISH JUGGLING CONVENTION (BJC) 2012

今号の記事

- 編集長近況
- ことば遊びとジャグリングの架け橋 ポンテ 良い演技には良い縁起 きんまめ
- 公演所感 『おいていったもの』 「サーカス」という名前 青木直哉
- 編集部より

編集長近況

しばらく、アクロバットのけがでジャグリング練習できず。その間、勉強はかどる。朝、ラジオを聞く生活。早寝早起き、悪くない。夜、しっかり眠い。17日から、先月と併せて今年三回目の海外旅行。台湾到着時の気温は、28度。暑し。発行日、台湾の台北市立大学で開かれたディアボロアジアカップ出場後、帰国。そのまま授業へ。眠し。

ことば遊びとジャグリングの架け橋
良い演技には良い縁起

きんまめ

●簡単な挨拶

きんまめという。大学のジャグリングサークルを引退してしばらく経った。当時はデビルスティックが大好きで、三度の飯をハンドスティックを箸代わりにして食べていたほどだった。とても食べにくかった印象がある。そんなに好きだったのなら何か成したのか、と問われれば答えに窮してしまう。経歴としては、JJFCS決勝進出0回、予選ビデオ提出回数0回、JJF参加回数0回、といったところで、とどのつまりなんとなくジャグってた人である。本稿はそんな人が書いているので、実りのあることは一切含まれていない。それでも読んでくれる人がいるのならとても嬉しい。その嬉しさでご飯が3杯食べられる、ハンドスティックで。FRCなら少し食べやすい。

●はじめに

昨今の産業技術の飛躍的な発展に伴い、現代社会を生きる私たちには伝統と革新のバランス感覚が求められている。伝統に固執する老人は新たな時代を生き残れず、革新を盲信した若者は先人の二の舞を演じることになるだろう。伝統が幅を利かせる場所として挙げられるのが、「式」だ。入学式・成人式・葬式などなど、私たちを取り巻く「式」は衣服や段取りが風習により縛られている。特にココ日本は「四季の国」ならぬ「式の国」と言ってもおかしくないほどに「式」文化が根強い。そんな「式」の代表格である結婚式に、余興としてパフォーマンスをジャグリングのことばのために

求められるというジャグラーが後を絶たない。伝統と革新の調和。ジャグリングという新たな要素を、伝統の支配する結婚式に取り入れるのは、深い考えもなしに達成できることではない。本日は、筆者が考える結婚式でのジャグリング、婚ジャグのマナーを述べていきたいと思う。

●ピン札のマナー

結婚式で注意しなければいけない伝統といえば、御祝儀だ。のし袋に包むお金はなんでもいいというわけではなく、いわゆるピン札を使うのができる大人のマナーなのだ。2人の新たな門出を祝うのに、使い古しのお札を用いるのは相応しくないのである。同様のことが婚ジャグでも言えて、結婚式では新品の道具を用意する必要があるだろう。もちろん新しいピンバッグはまだ硬く、おろしたてのディアボロの紐は摩擦が弱いのである。二次会会場はおしなべて薄暗く、少し狭いのが世の常。しかも披露宴のワインはやたらウマくて気分はほろ酔い。ふらつく足と、手に馴染んでいない道具でのパフォーマンスがいかに難しいかは、想像に容易いだろう。伝統と調和することはなかなか楽ではない。

新品の使用を奨めるにはもう一つ理由がある。これは実体験なのだが、筆者は友人の結婚式で、ヒビの入っているデビルスティックを使用してしまったことがある。後になって事の重大さに気がついて身の毛がよだつこと海底の昆布がごとし。万が一ハイトスをキャッチし損ね、デビステが真っ二つに折れてしまったら、私はどのツラ下げて「末永くお幸せに」と言えばよいのだろうか。また、使い込んだディアボロの紐が、当日突然に切れることもあるだろう。その時こそ、あなたと新郎(or新婦)の縁が切れる瞬間である。重々気をつけていかねばならない。

●2万円のタブー

御祝儀にはもう一つ重大なマナートラップが仕掛けられている。マナーとマネーは紙一重。「割れる」という単語を嫌う結婚式では、2万円を包むのはタブーなのである。そう、婚ジャグでは、扱うオブジェクトの数にも配慮しなければならない。基本を3と据えることの多いジャグリングと結婚式の相性は良好。しかし、場を盛り上げ

たいがあまり、4ボールやデュアルデビルなんかやってみると大変なことになる。それを見た新婦は取り乱して曰く「やだ、あの人が使っている棒の数もしかして、123... 4本だわ！割れてしまうじゃない！不吉！し、しかもあのデュアルプロペラ、アシンクロ!?! きつと彼との結婚生活もアシンクロになるに違いないわ！ああ！」云々。過敏な新婦のためにも奇数個ジャグを心がけるべきである。

そういう観点から、ディアボロは婚ジャグに向いている道具だと言えよう。ハンドスティックを1つと捉えるか、2本と捉えるかで偶数奇数問題を回避することができるからだ。また、ディアボロ大国である「台湾」と、おめでたい「大安」吉日は響きが似ていて、大変good。

反対に、シガーボックスはマズイ。何がマズイって、くっついたり離れたりしてしまっている。大回転なんかで「お！見事にヨリが戻りました！拍手ー」とか言った日には、新婦の怒りの拳を喰らいかねない。その拳に眩しい婚約指輪がメリケンのごとく作用して、あなたの頬に致命傷をお届けする。「お二人の薬指には光り輝く、ダイヤモンドが！」とか言いながらダイヤモンドを決めるのは良い。しかしこれは単発に限る。ダイヤモンドループにしてしまうと、婚約指輪に繰り返し性が生じてしまい、なにやら波乱の予感である。そもそも偶数シガーは避けると5シガーダイヤモンドに限定されるので、絶対にはいけなない場で決めるには相当の熟達度を要することになる。

●終わりに

以上のように、学園祭や大道芸と異なり、婚ジャグにはこれまで考えてこなかったような制約が生じてくる。だからといって、結婚式とジャグリングの親和性が悪いということではない。結婚指輪の交換は、ある意味リングパッシングであり、後ろ向きにトスしたブーケを皮切りに、花嫁と友人によるパッシングが始まる。人生に大切な3つの袋でジャグって、ライスシャワーやフラワーシャワーは新郎新婦に降りかかることなく、参列者たちの手の中で延々と循環するだろう。二人の切れ目無い幸せを願って。

以上、所詮言葉遊びの延長であるが、私たちは仏滅を避けて挙式し、末広りの八を好み、おせちの昆布を食べて喜ぶ、なのである。言葉を使って生きている限り、それに付随する意味も考えていかなければならない。それは、「式」に代表される伝統にだけでなく、新たに取り入れられる要素にも当然適用されるべきだろう。ジャグリングはまだまだ浅い歴史の文化である。いかにして既存の文化と融合していくかを意識することは、ジャグリングの益々の発展を考える上で大きな意味を持つに違いない。

ていうかそもそもデビルスティックとディアボロは名前が不吉。 ■

公演所感

『おいていったもの』

「サーカス」という名前

青木直哉

先日、ジャグリング&音楽集団「ながめくらしつ」による『おいていったもの』を観に行った。一時間と少しのステージである。

「ながめくらしつ」は2008年に発足した比較的新しいカンパニーで、ジャグラー目黒陽介を中心として構成される、複数人のユニットである。ジャグリングが必ずどこかに混じっているのは間違いないのだが、その結びつきは、他の日本のジャグリングのパフォーマンスに比べると緩い時も多く、「ジャグリングをモチーフにしたら、どんなものができるか」ということを実験しているような、そういう団体である。今回の『おいていったもの』は、ジャグリングの他にも、マイムや、エアリアルも入っていた。

まずは「ジャグリングっていいな」と思った。ジャグリングっていいな。今舞台上立って、ものを投げたり、服を着替えたり、ついたてを持ち動かしている人たちと同じようなパフォーマンスを自分自身でもやっているということが、嬉しく思えた。なぜかは分からない。

そして本当にいいものだと思った時は、演技そのものに関する感想はなにも言えない。というより、感動は本来的に言葉では表すことはできないのだと思う。私たちにできるのは、感動のなかで何かを書くことだけである。感想をもらうときも、ただ「どこそこがよかった、悪かった」だけでなく、一歩踏み込んだ感想を自然にもらえるようだと、いい。

批評なんてするからには、誰かが元気になるような、そういう書き方をするのが、いいとおもう。もし悪いところを書くにしても、批評と言うのはワクチンのようなものなので、適量を、ほどよく与えないといけない。あまり辛すぎる評価は病気の元である。

それで、私がもらって嬉しい感想は、自分が発表したものが、誰かに何かしらの感興を催して、それが誰かの新しいアイデアや行動に多大な影響を及ぼしたのだと感じる時である。だから私は私なりにながめくらしつへの

感謝のつもりで、『おいていったもの』を見て考えたことを書こうと思う。

青木の考えたこと

何について考えたかという、自分がやっている表現に「名前」を与えるということに関して、である。

「サーカス」という言葉の示す範囲が次第に広がっている。広がっていると同時に、その示す範囲の広さがどんな人にも分かっている自明のことだと良いのだが、実際にはそうではない。普通、サーカスといえば、誰でもシルク・ドゥ・ソレイユや木下大サーカスなどを思い浮かべる。『おいていったもの』のようなものを即座に想起する人は多くない。むしろ『おいていったもの』をやっている当人たちにしても、「サーカス」と言う言葉が与えるイメージの第一に来るのが、動物のショーや、クラウンであることには変わりがないのではないか。ただ信条として、でも我々がやっていることだって「サーカス」である、とそう思うのだろう。

ただやっぱりそれでも、「自分たちがやっていることをなんと呼んだらよいか分からない」ということは往々にしてある。のだろう。少なくとも、自分でそういう経験があるから分かる。一度、ジャグリングとコンテンポラリーダンスをつなぐ架け橋たる、丹哲郎君率いるCWC (Circus Without Circle) というカンパニーで、前衛的なジャグリングをやってみたことがある。その時に、自分がいったい何をやっているのか、たとえば友人に説明することが上手く出来なかった。ジャグリングなんだけど、まあ、みんなが思うようなジャグリングではなくて、でもダンスだというわけでもなくて、ううむ、と、お茶を濁す。たとえ上記の如く「前衛的なジャグリング」と言ったとしても、そもそもジャグリングに対するイメージと言うものがハッキリしていないのが普通だから、ぼんやりしたものにぼんやりした概念をかぶせることになる。

別に私自身が画期的な新しい名前を提案するわけではないのだが、このような種類のパフォーマンスに対して、何か特別な、それでいて皆にも分かってもらえるような名前がついていたらいいのに、とはよく思う。ノンバーバルパフォーマンス、ヌーヴォーシルク、などあるが、い

まいちピンとくるものがない。そういう名前を付けるのに苦心惨憺するのは分かっているのだが、やはり素直に、それぞれ、と納得できるような名前がない。「サーカスアート」は、なんだかんだで一番良いかもしれない。サーカスだけど、アートなんだ、という至極簡単な宣言だから。

だがしかし、表現というのはそういうものだとも思う。つまり、自分の中にある何かを、自分ができることで外に出す、程度のことが表現であるから、形やその内容は様々で、そもそも名前なんか付けづらいのが普通なのである。書くこと、というのも、表現のひとつであって、そこには様々な分類があるが、結局は、自分が何かしたいことをする、というただそれだけである。

つまり青木は、表現とはなんだろう、ということを考えていたのである。そしてその表現が、時に小説と呼ばれたり、時に絵画と呼ばれたり、時にサーカスと呼ばれたり、そういうことなんだろうな、と感じた。そして、芸術といえ、自分の心の中に起こったことを他の人よりも熱心な形で実際に外に出すということなんだろうと思った。本当は、表現なんて誰でもやっていることなのである。唯一違いがあるとすれば、それに向かってまっしぐらな姿勢で生きているか、そうでないかぐらいのものかもしれない。

さてその時に、どうしても、「サーカス」という用語を使うと、なんだかやっぱ、娯楽のようなイメージがあるので、違和感を感じる。別にそれでもいいのだけれども、でも、ああいう表現を総称してまとめてみるのに、「サーカス」というのは、何か少しだけのを外れているような感じがする。オーストラリアとオーストリアって似ているけど全然違ふぞ、みたいな、そういう感じを与える。ちょっとこれは違ふか。

だがしかし、依然としてサーカスということばをとりあえず使えることで、つくる方も道を失わずに表現が出来ることも事実である。表現するにも、「型」があると、表現しやすい。大体のことは、そうやって、まずもうすでにある鋳型に、とりあえず自分の思っていることをあてはめてつくられていく。人間は本当に本当に0から何かを創り出せるような、そういう創造の能力を持っていないからである。それで、頑張って何か新しいことをし

ようとしていると、いつのまにか、徐々に、なんだか自分でもなんと呼んだら良いのか分からない領域に入っていく。それが、「前衛的」と呼ばれるまでの過程なのかもしれない。

さて、なんだか言いたいことが分からなくなってしまう。とにかく、私は、ながめくらしつての公演を見て、考えた。見た直後は、何を考えているのか自分でも判然としなかったが、とりあえずこうやって書いてみることで、なんとなく、種のようなものが私の心に植え付けられた。ジャグリングを「アート」と呼ぶことへの気がかりの、私なりの答えかたの方向を示すような、そういう種である。本公演が私の中に「おいていったもの」だ。まだまだ考えてみることができそうである。 ■

編集部より

また、新しい書き手が現れました。嬉しいです。少ないよりは、多い方がいい。

海外ジャグリング紀行は休みました。表紙の写真は、今年もBJCの季節（イースター）がやってきたので、なんとなく思い出して、BJC2012に行ったときに会場の駐車上で見つけた落書きを載せました。

記事募集のお知らせ

寄稿を受け付けています。基本的にはこちらから声をかける場合が多いですが、「こんなものを書きたいぞ」という相談から、「こんなものを書いたぞ」という、引き返しの出来ない挑戦まで、なんでも下記のアドレスに連絡をどうぞ。次号発刊は5月5日（月）寄稿締め切りは5月2日（金）23:59まで。 ■

jugglerna0@gmail.com

ponte 編集長 青木直哉

ポンテは公式サイトでご覧になれます。

書くジャグリングの雑誌：ponte

<http://jugglingponte.tumblr.com>